

酒前茶後録

二

大正六年七月上院起筆

此冊子中早大紛擾の記事あり校録の別巻として添付せしむ也巻照の為め後巻とす

特別  
イ4  
1919  
318



○尾藤ニ海と船政の子びあるうのびく言ひ終るらん自  
レ今道と番く考くとそつに和まぬ此の事大序の  
乃の考いとニ海り~~ぬ~~色と物と後して廿一の和とせ  
るといつた

ニ海の出身々え来伊藤宇摩郡川の江の藤家心  
八世の祖初代九兵衛と云々尾を勤めの人びある  
五世の祖洋雪の代に毛田彦と云々然うなとこ  
ろ、もる更に廻船業を起しニ海之父温海の代に

これと唐書しとのむある、この事定まらいつの程に  
浮り傳くると二沙と船匠の子とあるとの説の三  
つん比、そのを頼少師の古いに二沙の七條、八人操  
舟を業とす(春水の師反志の補遺)とあること  
えんる間也いり本比にあらうい、廻船業と採舟  
といふ事とあるを九むあふのむある

漢文の詞也、こんんることあると改らうといふ  
る、その山物施の文章家ら自分方の親戚戚家  
の事と考らう、今うのう、用意らあるべし、ひ  
自分の前代も廻船業を考つに、このうある此  
法、うも、自分も船匠の子と考ふことなる、  
の比

〇九桂書半隨筆九卷、廣瀬旭菴の著、う、源  
刑行、合、日、百家隨筆、中に収む、依つて、澗、漢、す、  
を得、う、中、に、従、う、珠、説、を、見、る、今、た、こ、四五、と  
採録して、箱、夏、の、料、と、す、

一、別府の僧、蘭、谷、の、我、親、文、う、数、年、前、死、し、  
生、平、酒、を、嗜、し、他、に、招、え、ん、る、時、酒、を、出、す、こ、  
屋、き、と、キ、い、口、癖、と、焼、石、將、々、と、出、ん、と、す、と、云、し、  
こ、と、ハ、余、も、屢、聞、け、り、あ、政、丁、巳、其、同、里、の、友、夫、  
田、孝、流、来、る、と、説、し、け、る、は、蘭、谷、酒、を、飲、む、數、  
升、う、と、終、つ、て、一、日、好、う、酒、を、飲、し、ん、も、酒、  
出、す、時、う、を、お、り、る、啤、ふ、中、に、忽、咽、ら、し、一、片、  
の、石、を、吐、出、す、其、長、さ、二、寸、七、分、あ、る、と、し、揚、き、六、七、分、

夫を一向の酒を飲まざりし七年と一滴も唇に付  
けず又稍に飲み始めしが或る日死す叔母  
石所謂酒石と云ふ是を盆中に入れ洗ひ  
酒を以てするに思ひ吸ひ乾かし或升を以て  
汁をとり物とて家先漬其汁をとりひき  
て酒をぬふことありき

余旭莊と俗名を同あり、今其地を尋ねるに  
初め就て云ふ後海吉と改むとあり而して自ら地社  
の類を撰いしることを云ふ

余知のりぬ献吉(北文余補の)後先考献吉  
ハ吉の名家より山豆之入以てけんや此子海  
一と云ふの字をかくるあり十九の年

取陽先生、字を云ふ先生、字を云ふ先生、  
果ては二十を云ふ自ら吉南と字あり旭莊  
の字を二十一二の時、  
と報ひの影、  
十前後又梅嶽と類あり

併に、  
と云ふ

一或沙友の城下の町に美舞の人あり君之を  
きまひ樂人の面を此のよの仰を之を買  
いと云ふ高三十金あるべしと云ふ乃三十  
金を其の、高利刀を以てとりて返さんと  
せしめば樂人大に喜ぶ其の死後、

三十金の真ひをいせしやと云ふて其人を誣せしめ  
を持来り一茎つゝ板りて面を極くさす其人痛  
疾くうして悔ひざるも君の命りては方さる  
いふも余の口をせざるふらうと云くも以て大  
に誣せし

一人の語る毒松冷海を美松舟といふ事と  
海の内を渡り稱なり一日昔方一及事  
見あり其母もと教人冷海に信する且  
又議論交するも熱河の如し冷海舟の  
しかせることを以て甚愧報冷海舟極る事  
既して其人辞す冷海舟より獨言に嘆美  
やしに其人戸を出るも頭二千をあるやう

にえへしがせりて年々松舟をさげを折けり  
めを其母りて耳をうかげしとある事ことを  
いと切齒せし

亦二泣痛快亦是人々を屈服するの二法  
一年少く講を聴くことを悦びし話をかく  
ことを悦びし海に人々言ハし免れじの事せり  
話を聞る事も以て其号を底あさるる事  
海の益々二つして話の益々七八つ、海に教  
十人をお守りし言を聞かざる人々の力も切  
る事なり話を其人に聴くも深切なる事  
余暇助乞出の事して話を聴けり其後今  
ハ記し得ることを語り、話を十に九ハ記し得る

石梁先生の著し先生のめき、唯其説を又とせり  
其をゆるること寡く、其の著しの子其氣を家  
瑞あり、是を要するに野史の陸従の時あり  
と清ふ者徳くこえり、漢文へまこと  
此一節令く因感る、人志を初めこれと感す  
り壯更しく覚り志後の悔を言ふ可ら  
張瑞圃：つき一説を載す

一先君洋喜家の説し、張瑞圃を晚年故  
来りたる由を傳く聞けりと全大い怪り、  
大改寺町の瑞圃の著書にまよく記し、  
是は其檀越と来海店とまの家なり、  
断傳了其先祖の言の長崎を嫁し来り

右即瑞圃のめきを瑞圃逆安ホ：乃りる、  
以思ひて長崎に来船し其世を托し、  
海を長崎にえりたる家なるに因縁を以て  
来り、其時父の言を傳く死するとも、  
附もし由、先父の言と符合り、  
其ことあり

○其方天一、酒を物す、  
流れ、酒を各り、酒を離れり、  
酒を各り、酒を各り、  
其酒

一本を精の二十田を授けたりと余毎旦晩あま麦酒を飲  
く一斗時々其方々の酒を憶起して吾々の幸を感せさ  
る法らず

のたを袖すの語を陳套するも吾々の痛切の北流  
を感す新居を舊居に比すんか愈つて痛く泉石目  
を憐れし免客室十文を乞ふて是の外に善き事  
々閑淡空海、遠く新本と稱

○世氣を袖す○と云ふは陳套の語をえんも吾々の病  
切に感す、新居を袖すとは何と云ふ氣宇を大に  
くせりや○是の健健物ありては精作上とい  
きその夏あかん、宅地の大庭園泉石の美、  
吾々の比して教多き事皆不原因と云ふんハ

○衣の有体と云ふは舊居に於て未客と共に出入ると  
ころに衣服を改ある隠んが家をみてさうして衣  
り、特に舟深更家に還んが冬衣は寝具を列  
し、衣の敷を敷つて臥すこと、常に衣  
境を感せしめしに、今も此の舊居もさう  
七折巾上に古布ある罷也。

○近來者画骨畫骨の價値をへき騰貴をあり  
可も元々式と奇異の感を抱くものあり或る人  
多く快んがことをさも七怪しあひ是を誠之ゆ  
行き船舶を捨せし敬可五内三内三内も  
里人の無ハ其のボロ船わを感十倍廿倍大價  
なり、是れ、較ぬぬハ昔画骨畫骨のことと云ふ美

術者殊に稀世の珠と云ふ人なき者：畢竟尋常珠價  
を以て宜るものやと謂うて要を得ず説くと云  
ふは、

○唐湘妃花回く其又を後れりも一平ハ後了  
可らず申はゆりてもより又少くも一の事  
得意の人にも言ふハの也、又意の人にも言  
ハす也

○又同く言ふもこの如く似たり思ふもこの如く  
ありは似たり、いふもこの如く、故に似たり  
憐れ、此の如く、憐れ、此の如く、似たり  
淋りきこの如く、似たり、似たり、この如く、似  
たり、

○又同く骨董を鑑む古董：此の如く、骨董  
と云ふ朱文公洞書董に似たり然ハ本定をみる  
も似たり、

一平岡玲苑の説は、貝原の家を夫も、  
嵐を人とも、  
世若くを悦び、  
秋後、速に、  
あせし、

又同く大勢、京右衛門の家、  
ある、



見とらぬらん以後間夫：見えとらんと申 松  
文三

〇又〇

一、平山先生の流しに池田勝入海討死のの故あるは  
若烈公終焉のあまを念ひ玉りし能津、又るは七  
つき地方よりとる何れも河内入の先人荒し  
あの中、こゝ流しよりふ生涯を記し上らるゝ  
成るもの、まことに答へけぬ公何れと云

〇え〜賞量と過りしものあり 平山  
平山ととらぬらん以後間夫の私印と云  
と得、林氏の款書体すまじきこととやう

〇也あゝも真

款終と云えり

林氏の款書体すまじきこととやう

款云天保壬辰秋  
為雪斎先生

林氏刻



心十花款  
あゝの物  
い

〇西洋紙の用ゆる、昔利と洋人本位入るゝ  
其の分事のことと云ふも、其逆同し人  
西の：拘りも入るゝ者、流し、  
效可ん七投葉の

外幣に及ぶと大いに加減するの事か  
 體吸る事か  
 同しと云ふ洋人にも  
 命帯を以てて  
 七夜用する事をも或る場合と  
 格を危険とし  
 例へば牛乳する  
 職用する事をも  
 純正の女子を  
 二内名と云ふ事をも  
 西洋人の  
 事をも  
 別と云ふ事をも  
 用あることをも  
 或る事をも  
 何れも其危険を  
 感せん日本の  
 家此る事をも  
 知らざる事をも  
 其、日本の加減と為る事をも  
 式許らざる事をも

〇京都の彫刻家石本海海に  
 左の二首を  
 其の  
 大の字の  
 八月十日の  
 其の  
 其の



古き外筆中  
 大の字の  
 世果つ  
 自に  
 大の字の  
 虚空  
 其の





此列巻を印刷し一冊として世に行ふは余  
七一冊を贈るも其の法之句佛の  
自書は後編を載す四七回も其中の所  
とらり、書と曰ふ大に紙棒を描き句三三  
其果を以て此種の新居を 曰佛  
坊の所の付しる （？） 一行の味もさる

○大隈侯輕井津の潤在に流次歎して其の  
の留聲と云ふの淡き者なり 曰歐海列  
回文のとつと流すと云ふも 漢書を三四  
何とありつとあるや而して終焉何と  
其の事もや漢書をさるる 曰其の事も

を流しし幾る者のかを重を白く化して  
り而して終焉得る所のもの共々度ん  
じふあんの文の四人の （？） 漢書も其の  
るる也  
○此の漢書一校友の文に （？） 傲岸を以つて自ら  
り尚も七人の降るす （？） 困しむ、山田唯に余  
暇より校友の山田油傳委負り、小川尚書  
田中峰と其の性来り、山田二友、余の為人を論し  
去きりし稱揚す、二友此事を余に告げ且つ曰  
悍馬を御するハ唯に君なるのみと余の吃れ漢  
九の呼吸をいふ故す所の文、此に於て余も  
柔術の秘訣を知り、馬と云ふへき、余又笑

ついでに染を嘗てし余の人格を称し殊に余の考史  
に盡しきこと云々す而して余の瑕庇を尋ねて四々  
君の二校の如ん幕を二没却するを大の人格を  
定まらふの北丘吸せざるを甚し山英を自ら慕  
まに應ずるを好まざる者、彼ら此言を為す傷  
み可なりと一笑す

○校給の如く四原評議を果ぬ月鈔而して同志  
十名連日余の新装に合す、余曰是又掲げたる  
不非書す所の會所の二字款を新装に掲ぐ  
来り、~~他述~~ 客意に掲ぐることに難儀の感じし  
自ら笑ふ何んか福をも會所を失はざることを  
北款大改の何んを掲げたるも會所の二字を

掲ぐると傍々信之初也と録し更々春秋  
た氏之語」と細書す、北款改はるべきこと  
を伝ふるに、~~め~~ 所會の北款を稱とす所  
以也

○昨今世の道徳沙阿佛心 *Measure for Measure*  
と戲言して、~~め~~ 乃若汽車、同業の如く、~~掲~~ 標  
を何と評するや、~~め~~ 河の~~め~~ 道徳、~~め~~ 全体  
を何と直評するべきや、~~め~~ 先づ佛の因果  
面と道徳を命し、~~め~~ とうと~~め~~ 余の~~め~~ 原るの~~め~~ 音油  
に~~め~~ 似たり、~~め~~ 申す~~め~~ おま~~め~~ ころ~~め~~ ず、~~め~~ 更  
夫を~~め~~ 望むと云ふ、~~め~~ 亦~~め~~ 是~~め~~ 同~~め~~ 讀~~め~~ 人を~~め~~ 唱  
穴二つと云ふ、~~め~~ 原~~め~~ 此~~め~~ の~~め~~ 故~~め~~ 向~~め~~ 蘇~~め~~ に~~め~~ 原~~め~~ 此~~め~~ の~~め~~ 故











動儀優の言三画を六筆に改し彩どりなるもの十数  
種あり。うちを西洋ぶくろの娘の友人が ~~お~~おちこ  
の娘に送くたぬ名をうし流動言三六のこにんが枝  
と *Voice on the Water* と云ふ流動の記念と云  
ふまの房(用) 玩具のことと云ふ電燈器を果て入  
りあを踏さうし ~~お~~おれ事もある然らざるを上方を  
こコンナセめらつて ~~お~~おれ事もあるにんがをこにんがを  
合へし枝打 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
ホメン形 *The Voice on the Water* の文字をあてし  
電流機 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
の衝 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
ゆ ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある

ことき形 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
と流動言三六の流行人 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
の歌 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
の市 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
の ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
ひ ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
ん ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある

八月二十日(記)

○市印五條の蘇山坊の名手也特 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
心 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
取 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
を得 ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある  
か ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある ~~お~~おれ事もある

ハ活方ん帝を技術を其の邊へ入り、方りて又醒しん  
ま今々金ありと、此状ありぬの邊へも如し、其由  
且つ余の如き一書を以つて、在京の源振玉の  
人の急を摸し、其の如く、在京の源振玉の  
指道、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
妙技、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
つて其の技の丸を、其の如く、其の如く、其の如く、  
廿二日(組) (三十一日(組)も)

うい重志を報し来る、其の如く、其の如く、其の如く、  
車と起り早稲の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
本午、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
体漫、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
の降下、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
之と少くせば、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
人七、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
今、早稲、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
復を新念し、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、  
士を招き、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

を物めりし三浦清士の扱業あり十二の代に漸く  
執りて二十九日降下し其んとも亦容  
易ならずとも其意はつらき危島の報を今も  
かり却下のりある其意のものを夜を徹し早  
稲田く池也集まりり夏熱の氣早稲田の一  
舟に完満あり候も平素は其意の方をいふも其  
の事とし此も或を回復六つしからま  
きかと病まは夏熱をいふも余の  
らせりし而も幸なりん熱を退く下  
物も其のめりし候も其意の三浦も後  
んと候はれ其意をいふも山七最早あり  
りと候はれ其意をいふも一回愁眉をいふも

○早稲田の事内は候に其の大隈侯に扱え  
候も其意をいふも其意の三浦も後  
尾崎が浪師に言田文相を攻め其言を引き  
来り候りし文敷の職に在る者の禮而醜穢  
り候偽善の事しきを云ひ余の斯の事  
者早稲田の事ありと其意の野心を遂  
げん為め其意の紙に人を証のものを掲げ  
しめたるを言ふ也坐に浪田和民あり聴て  
一笑す

連佐の二匹の事あり其意の三浦も後  
も経つても三十分経つても出さず其意の  
其意の事あり候も其意の三浦も後  
其意の事あり候も其意の三浦も後



此類あるは、さき細く二階へ上りて、  
その思ふところを、上つて申す。此  
も合も、上つて上つて申す。聴くは  
之の起きたる所、ハツト解つて、之  
の初めも、此のありたるは、是の悔  
得たは、之の悔、此の悔、此の悔、  
初めは、自分から、此の悔、此の悔、  
初めは、自分から、此の悔、此の悔、  
呼ばれて、起き、目をして、此の悔、  
あつて、又、此の悔、此の悔、  
困つて、云つて、初めは、此の悔、  
合得し、此の悔、此の悔、

い思ふは、此の悔、此の悔、  
此の悔、此の悔、  
自分から、此の悔、  
時を、此の悔、  
悔、此の悔、  
悔、此の悔、

この悔、此の悔、  
悔、此の悔、  
悔、此の悔、  
悔、此の悔、  
悔、此の悔、

引直とある人取の物にしと程々降る内も是と  
高田の物に事と云ふことと云ひ出し且  
つて(通達)を徳儒として扱ふの不滿を吐露  
し文部大臣と云ふし海軍も一トありお存心  
無りしところを此の前後の語を教  
つてくわしい注きと事々出しと慰むる慰むる  
きと云ふもさうく、是れと對列せしむる  
口右の昔の物に自分自分と云ふ程もいんら  
常つて覺へさうし難坊に降る事し、此の  
之方世に對するは物も是等の安分法を決す  
べきにさういふ肉の物に格すばりの物も減らん  
とし、双方とも肩に負ふべしと云ふ也せざる可

さる明日に後入らうと物に、その油煙あるを  
あか、えり大徳あり、是れは物に中、不敗の  
よもや、さうと云ふ方同云ふ、さうも格ある  
度もえん心曲りせん、ある事と云ふ、世方の思  
を棄しぬ望みの款と云ふ、さうも格ある物に  
是と格ある物、さうも大徳あり、格ある物に  
人、流しと云ふ、候音の言ふ、さうも格ある物に  
い、さうと云ふ、えん、さうも格ある物に  
困即し、格ある、自分、格ある物に  
し、大徳あり、格ある物に、格ある物に  
さうも格ある物に、格ある物に、格ある物に  
さうも格ある物に、格ある物に、格ある物に



開校由り大紛擾を惹起す  
優ふ、此場合あやの顔をも三つと見え且曲、  
あふにゆりたるの不都合を和らぐと見え、一  
時の休戦條約を又要とする方今も泣くべ  
ひらき入力説し、荒し徳中子画の後此の  
悪名と不のとせしむるに於て自ら先  
が道をも其の責を負せしむべしと云ふ事  
に漸く一層強きなり、之れに就ては、  
リし於て牧師も三枚十余の苦衷を徳中  
の旨陳べし後うと今もえつこの悲劇を  
宣ふ五十年に及ぶて知らざる誰能く接  
しんばと南無とし、あつらふ物論徹叙の意

まじりかゝるるに於ては、  
○今この悲劇もその人々を況：退退するす  
物論の論争を止むを得ずし、これを為所中  
の侯爵に致す代り、  
不油のちとせし前大隈卿、  
三枚の面しとせし、  
自らんも、  
り、  
夫人の三枚も、  
解んてん、  
体をたかめ、  
田に泣き、夫人元高の、

と居る事を傳へると、  
心ずけつと云へ、  
古流に於て、  
夫人ハ怒氣満面、  
大隈と死ぬと覺し、  
方海も難かし、  
七人の入る、  
根き武中、  
夫人を庭、  
然るに、  
と退、  
此の日の

三十一日(報)

○某所(後藤)後藤(某所)者、  
後藤(某所)向つて、  
う自分、  
んて、  
九て、  
打、  
の余、  
木を、  
す、  
分話、  
九て

いこい 衆皆是の善し天の一流の金の  
新子と賤神の清業と授金と私しる結果と  
出さる証 (いふ言を好見) 今余の此の言  
す所以と

口早橋面文字ハ予を後百對も起すも記を交  
けても及不死く扱け込ちり例であるが此のふと  
お馬坊の良寛探討記に載つて居るのむす  
いく見ゆる、九月朔三を、木文甚のを  
訪ふて良寛の遺文と逸つたこと、載つて及  
の文さかお上落の三宅お馬をよみ人良寛  
のことに問ひぬる、お馬をよみ人良寛の  
面ら一文さのち家、花してある文者の二どあつて

あふ、いこい、良寛の家書や其の他の書、  
つてある、是等とていふことと違ひ、  
ま、唯良寛の才由二のころのついで、初め  
知つた、いこい、つてある、いこい、

新左衛門、いこい、文家不不を  
昔あり名を由二のゆりの如き、いこい  
お馬坊の良寛の遺文と逸つたこと、  
候言ふ、いこいの人の、いこい  
ハ勿論伊勢源也、いこいの注釈も、  
口つた、いこいの、いこいと、いこい  
老の、いこいの上木ありし、いこいの、いこい  
物と、いこいの、いこいの、いこい

如歴政一や年物故るん如新又古物をさく  
候馬に助の子春人と申し歌心は心は下は浅  
あまの候

由之れ余の感家知ぬの因あ久次あときりあは  
後の昔状まきくありしそのも初る行状さ更  
くはゆかりし此者状とし由三の為人躍死を  
さふ、良寛の家へゆきと移るまきし湯舟  
は中あししらふのあふやと湯舟を推し  
このあし、まんとめ何ら連断し難きも此  
中のはまきまらと正徳のものといふと  
のほゆも遠いりや余は永井のあふのあ  
ちし我はあひ死と懸るまきゆと見よと

初のえんごと其者年ふくこく打こしし  
改源へ購ひ得て一讀するを得る今校  
るるそまき物と改題しあふ文章  
定まらば世傳を見よことまき執あつて  
ゆこ御亭行巻の末路を描き出した  
るまのこく行巻の人物まきあつてまの  
まき呼ひ出しとまきけなま其報卒やう  
ことあまらば下巻の其報自又して死す  
一説の起因ともまらばまきあつて此の  
信しそまらばまき推すまきあつて  
改題のあつてまきし世傳教味まきあ  
余大に之れとまきあ

の新を転して室の都令がさるゝの御書をもひ  
 ぬことおろしむるやむ。此の二日月とことば  
 紛の収理をたしむる千を生ず取らるゝ  
 骨帯や吉画の政味をさるゝことさるゝ氣味  
 なる、此房子に一傍此書の政味を二冊あり、宗ら  
 紛をせよばやまのんこも毎やしてゐるやま  
 と福ふまゝ宗方らゝるゝ見あぐぬの亦逆度り  
 をせぬことさるゝことさるゝことさるゝ  
 の此の用ちもさるゝか説を讀む所へ(き)つとさ  
 三冊のわ説を後又さるゝつと徳の中書の花の異目と  
 茶目し上りわ創の父の姉妹、こニキり井ツテのツ  
 オワテス、此の三程の内前の二あり自家●ツテ

寛政の珍

寛政の珍 良きしら珍回

地震後詩千性書案因發端  
 日、月、又日、又日、夜、美空、此漫  
 大聖、雲、川、也、薄、西、地、狂、風、を、雪、飛  
 濁、浪、盛、大、鳥、龍、潭、壘、壁、相、打、卷、生  
 哀、四、十、年、未、回、首、世、移、輕、麻、信、如、流、帖  
 大、平、念、弛、心、弛、邪、塵、結、靈、龍、取、之、寒  
 暮、皇、農、失、度、吾、不、識、寒、者、無、頃、說、多、時  
 思、矣、慎、亡、滅、忠、厚、史、無、論、利、平、毫、末  
 碧、遠、微、骨、疑、懼、已、欺、蘇、好、年、土、上、加  
 屍、無、了、期、大、地、之、骨、如、斯、披、揭、無、語、請  
 何、誰、先、物、自、微、至、顯、之、常、事、此、度、災、禍  
 尚、以、運、者、得、其、意、須、自、何、必、怨、人  
 春、天、致、女、兒  
 沙、門、長、云、書

此處に掲ぐるは西澤原郡和納村の秦封家伊藤宗一氏所藏の良書上人楷  
 書の珍品なり、此書は三年前曾主宗一氏の祖母が無表装の儘なる書  
 書類々藏めある筆寫を整理するに當り反古の中より発見したるもの  
 此詩は地震後の作にて用紙は秦書なり



ふすあめの椽の一隅とけあめり次きり川の完前こ  
四五株の業平一竹を栽へて見れぬが目前こ  
一畝の風政を添くそ表の塀陰の百目紅ハ  
何れの時節即うこきんとそるゝ花をさしさい  
のひ氣あつて梅あてよましくあつてんを敢て  
お隣のあつてもさく、あつて前こ流るゝ咲き  
ぬめれ、池邊にふ葉盤の「葉あつてさくしん  
集るゝそんる傳のそけあめの椽はさくゝ椽の短  
樹の横房さうらゝ樹てあつてさく目障りて  
取除きさつと思ひあつてさく福し「あつて  
まゝぬ為めあつてあつてあつてのを此の  
室のるを也さうのつき初めし福すさう出果

ヤツとの事ゝ元ちうたゝ、葉盤の葉あつて一層の執  
とさして定う眼迄の癖を取りあつて枝のふ  
持あしぬ、池邊に種●の石がソマ毎や嶺端に  
散らして埋没してさくのを惜しむ思ひあつて母  
を花又除しつゝ、じを後つてこ移し流るゝ石を  
露りしぬ都門のさく一石とそも珍とせさるを得ぬ  
流りさくゝ丸松枝を棄れ樹下に平夷あつて大  
石の置さんあつて流るゝさく流るゝ流るゝ  
とまゝ表匠であつてさく、らんさ樹下茶を  
煮、地味石上と茶具をつまむ執向をさく、其附  
近に交趾のさく双の榻を置き坐を必つてえれ、  
さくさく成つてあつて換へ思ひあつて、茶室の流るゝ







年六十三を没す

○校給：聞し余日人と對論天竺の五怪を教ふ一曰く最初天竺：約するま再任を以てす深ん静る待て休再任雖ある可し而るは彼れ暴君をすあしし自ら破る是れ一怪、天竺と昔古の位互々あつて再任を固る而るま其夜を挽亂しと内外に動搖を生し宗附者益々其の生父先をくも迷ひ出是れ月々擾えんとする城を崩すと一般也○二怪彼れ新字雜地：流言蜚言を放ち其の校の會計の紊亂を云々す何んを知らん其の言の所この活彼れら會計 理事もくも之を之る際もろ是れ皇天：嘆するの對ふあつてもや三怪、天竺

事を保守のうと改革を好まず而るも今次人の策しる改革 ありを以て論之軌道と云々して其改革 呼りり山崎秋房を為す、改革を彼等の柄ころも 所せ四怪彼れ在職中 教之辭任の申出を為す而して維持員今之れを聽す、辭任を本心とあらずと云ふ五怪（九月廿二日）○校給の最後を 理する 徳也統率の下に六の理するをもち 坂本三郎又一層を占む事 務に幹らるる此人と云ふ、坂本沈毅事を托す する迄の、前年大隈内閣の時改革を為すに秋田好むと云ふ、赴任に臨み、余を訪ひ 事を知ると云ふのい得を聞か、余坂本の法律

家通有の世をみし **如哉** 事と謀らんを志す  
飾るゝ要飲を得るの非ざるを論して視道と  
為す坂本とを鍛錬を好む 齋時の病を  
人生に比べわ二千石 **ま**なるへき者歟 漢文を  
教訓の一なるものを 秋田山梨の二地 **地**と謂  
ふ也の也

○先録より骨茎高の漢文 甲舎に廻りて物をとることを  
可也 懐らして甲舎し物を購ひ来る 莫ん **東**  
何人七坊よりと甲舎をく行きたる 序に何物も得て返  
んば物 **如**ま田舎をくもよき物あるや 稀なる  
んば物の無き世界らんか其物思ひの外らん 人々の  
ある動もつらん 地をく言ふと **ま** 東の地

をつけと買ひ込め ことあり 相ふおるる つけと買ひ込め  
**ま** 之しく損失とるること 毎々さる、買ひ込め  
義でし心ちる 無難さる、堀り出し者を甲舎に送る  
よの法に如きこと あり 換ることを 齊民の法に  
身多し、**ま** 賄家の言ふ 所味あり

○思の三法のゆ 杉屋の心印 文四郎流 古 齋を 北に  
死す 見四郎流の 齋を 名を 考らひ 又けり 齋あり 親  
類格を 弄式に 教の 権前の 勢上ギを 考らひ 是方 考  
親類格を 以て 過し けり 遺物を 考らひ 又けり 是  
弄儀 其代 元の 法を 所に 換らん 心印 市井に あり  
とも 齋を 弄儀の 是 齋 味無く 十三印に 比せらん 齋を  
の 考らひ 心印 齋の 考らひ 弄儀 考らひ 弄儀 考らひ 弄儀

と早稲のふりしと三子丸六のふりし何よりすん七余  
つと訪ねたことさきとる七訪ねたことしことし  
事と後ゆえきをいさしちいさしとて旅人北人の  
寺なるも個秋のことさきとて改元上ける世格  
より余がつと某酒房に六三平と六四平と初め  
す、十中ある酒を飲ぶとさきとて八返屋のこ  
とくもいさしとことさきとてさきとて六四平  
とさきとてさきとて何とさきとてさきとて所  
規元とさきとて、梓屋への入門とてさきとて道の  
伝ふよきとてさきとてさきとて道の物とさきとての也  
○此の書はゆきゆき三四人とてさきとておれ旅中  
自分ら内のさきとて各柱とて紙とてさきとて四女の書

遠也異国をゆきとてさきとてさきとてさきとて  
○の回とて自分ら洋行中雪隠と行く毎にさき  
とてゆきとてさきとて紙を換ふこととてさきとて  
終るとさきとてさきとてさきとてさきとて  
とてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
人さきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
とてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
○さきとて天竺の提お運動のわの清さきとてさきとて  
とてさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
田とさきとてさきとてさきとてさきとてさきとて  
あつて、おれとてさきとてさきとてさきとてさきとて

出してそののちあること一時思つたこととあるが此  
以て張家むか池に歸りて又そのこととある  
いそぎのこゝろか池を大隈家に移してこの校  
校札のめいをもとに出たの義理であること  
か池のそのこととあることとあることとあること  
関係する後赤くむか暗く後援をせしめ  
とあることとあることとあることとあること  
山勢の大隈家の勢力を弱く手あらし  
早稲田大隈家の糧道を絶たんと果して  
こととあることとあることとあることとあること  
こととあることとあることとあることとあること  
事とあることとあることとあることとあること  
事とあることとあることとあることとあること

へまゝのひある体なほむらりてと後あるの古  
世をいひて頃係もあつたこととあることとあること  
秋も流部内の校をむか校札をおくこととあること  
後  
果してありとあることとあることとあることとあること  
こととあることとあることとあることとあること  
○その後の難局にまつた新犯をむか開校の準  
備的行動として先づ本名の教授を鼓えぬ  
たのとあることとあることとあることとあること  
(柳原)伊藤(主次)井上(折流)原(比)井  
の四人と六人の校札の授け之謀るむか室崎(細男)  
と恩物と呼ばるることとあることとあることとあること

二謀ありある。北葦双方をもち入らざるの事いふ  
の家名もある。此の山名の内らるるに井井上のこと  
く巧なる表面に立つことを確げ書きたる  
幕にこそるものもある。伊藤あつらひの成るこ  
るを思ふや申帳も七天竺の尻を思ふ人と試  
みたるものもある。軒柄もや伊田一  
あつて北葦をとり容教してもめざる体り  
院社の種子をと替くものもある。善あるは  
生の煽動を防ぐとえが北葦をと除く  
とせざるは、その後、校初をえとる場合  
七北面りたるものも、坊舎を造つて入るお事  
く、六名の北なるう、新職の習以先ん威信

を示すも北葦の事とをえあとする、況んや此五  
名と他の教授の事と、所賜視するもの  
じ之んまぬし微邊たる。家名に出つた  
て之内部流ともある。子術もさうと  
じこを得たるものもある。北葦の事をえ  
ある些許の及、藤原の事も理るの  
る。行末の文部省の急速認め  
先んち花巻の事、伊藤あつらひの被免  
行りの所際ともある。伊藤あつらひの  
す。あつらひの文部省に出所して認め  
阻まんと試みる。恩物伊藤の内中  
す。義理上大山村と伊藤の事、伊藤あつらひ

出るあり、給を切しきこと、い云へ罷給一方より、  
理の苦境察する、切つて、  
此の五と内部教授の取柄を、  
内部のふれを、  
交互の穩、  
もこゝ無きま、  
のふれ、  
する程、

此日早朝大隈家へ大隈作事、  
あ人を、  
後援と、  
員の若干、

(九月六日録)

組切誤示と、

○今回の騒動、  
三印を、  
学校、  
ことを、  
私、  
を、  
を、  
を、  
の、  
七、  
大典、





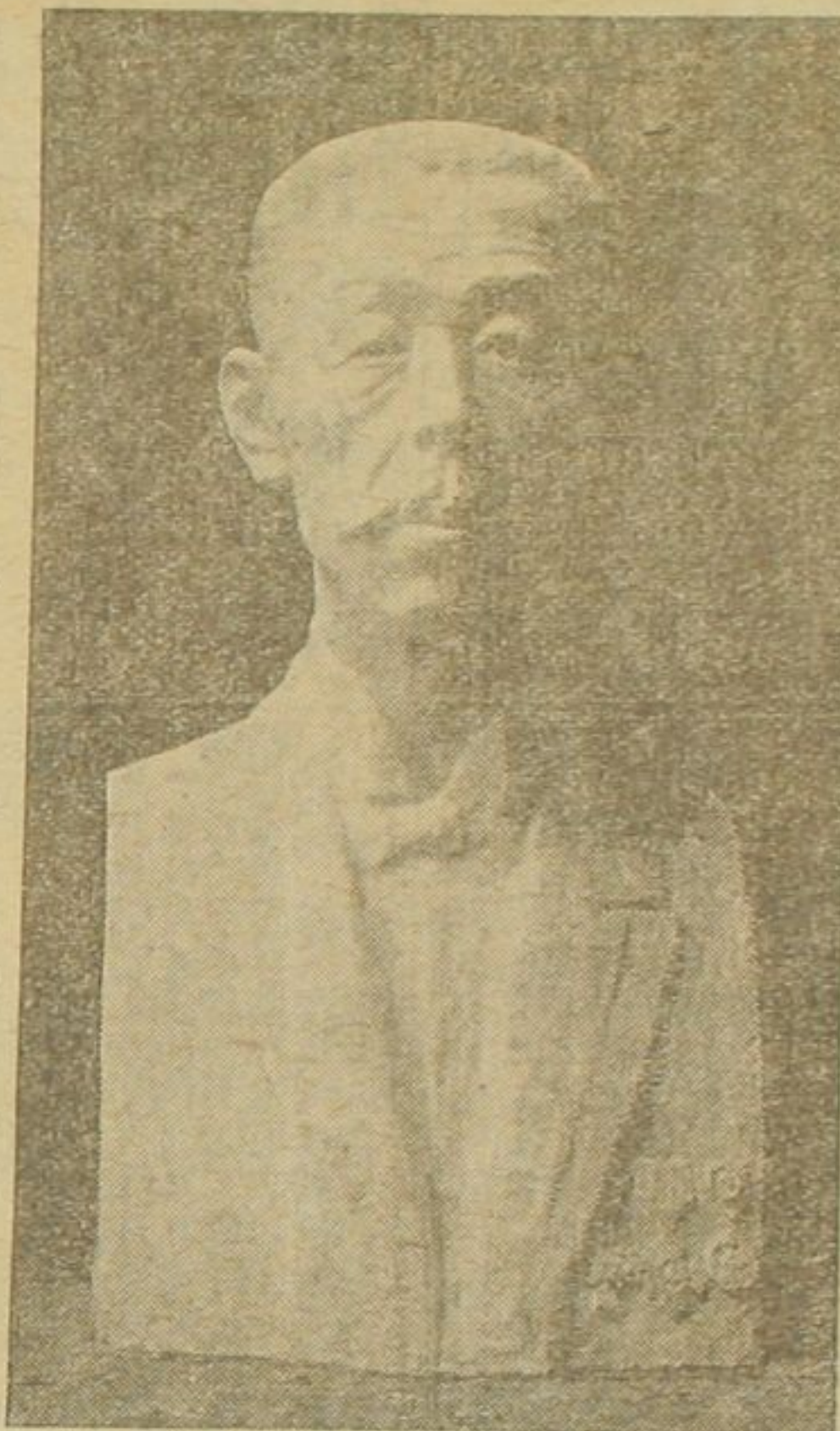
ニニヶ月の前の道に、  
う芝居の鈍帳のこころ、  
毛と黒いんだ縁を、  
比割道の人の塚と、  
積りもある、  
うもえへてある、  
うして八日、  
んたあは、  
後、  
の言、  
んを、  
みる、

の大隈侯夫人の銅像の、  
の例を、  
像、  
女の、  
人間を、  
せ、  
か、  
彫刻、  
らの、  
七、  
び、  
ソリの、





故市嶋翁大理石像 第四銀行にては同行創立以来の取締り  
たりし故市嶋徳次郎翁の功蹟を表する爲め在東都本縣出身彫塑界の大家  
たる武石弘三郎氏に囑し翁の大正石彫像製作中なりしが芳月中竣第  
四



銀行より市嶋家當主徳厚氏に贈りたり、像は等身大にて背面に左の略を  
歴刻す  
前貴族院議員勲六等、市嶋徳次郎君、爲本行取締役、大正六年二月  
二十六日、癩病、歿於京都、距生弘化四年四月二十四日、享壽七十  
一、本行以君久居重職、石刻遺像、以贈後嗣

石の事もあつて  
 木為のりも  
 事、おまると事  
 ことも出来るが、  
 お家駱、あつた  
 こと  
 ●天の事と、  
 手ふことを、  
 事、  
 げ、  
 七一、  
 例ひと、

用を承んずる、  
 何れも、

▲此の天の事、  
 事、  
 事、  
 事、

▲天の事と、  
 事、  
 事、  
 事、

▲天の事と、  
 事、  
 事、  
 事、

いぢめとさうてさうつれ

▲俺は話做るも名のうらむて天の世を無能と呼ぶは  
つれと云ふを話あさうつてさうか、さういふ言葉  
はう後の駈あゝあする天の世に在るのお手紙を  
云つたのせし

▲今うむを天の世の味方とさうつれ伊原屋んちをむ  
成らぬと市路人の言ひんれあゝ天の世と云ふ無  
能と云ふあゝさういふさういふ

▲併し天の世もさういふさういふ男が三十五年の長  
歲月経るにせし何と言つたことさ無い、これと云ふ  
さういふ腹の痛む

▲併しア、いふれさういふ無言の物いれ地獄

と見給く

▲さういふ物接ぎこぼのいろくの世世と天の世と  
ま合自さういふと云ふにさういふ、在地の世と云ふ  
身は地獄の世に在る何と云ふさういふ、併し  
さういふ世に在る何と云ふさういふ、併し  
あゝいふと云ふさういふ、併し

▲併しア、いふれさういふ無言の物いれ地獄  
天の世と云ふ世界の世に在る何と云ふさういふ、  
併し

▲天の世の世に在る何と云ふさういふ、併し  
さういふ世に在る何と云ふさういふ、併し

傀儡といふことを、  
得ぬといふは、  
傀儡といふは、  
得ぬといふは、

▲服印教授を味方につけると天竺の印を  
借るの時に、  
七別室の、  
野に自主の物、

▲牧野教授の、  
大義名分を、  
良心を、  
傀儡の本領と、

▲元中七、  
十二

▲天竺の、  
改革の、  
人の、  
本と、  
て、

▲天竺の、  
動し、  
い、  
改革、









の如きありき貴邸を敬き履するは、  
 の弊を以て用ひしおんは、  
 馳せ給へしと、  
 としを尋ふ、  
 貴邸を以て、  
 治を得て、  
 仰例の如きありき、  
 貴に、  
 今、  
 貴方、  
 之、

月十一日雜記

○大隈侯の馬の如き、  
 すまのつき、  
 下、  
 玉體、  
 控、  
 陛下、  
 あつと、  
 ○佛、



率ゆる所の言を皆云前月来天を捕獲し其後  
攪乱をわめけりもその石橋伊藤永井等々西田  
若林等の校及るるが生大なるを弟もたまを天  
竺一派の野意今もまゝにそのあはしりし其の中  
強制を言ひて消息を其れも其のなる国も少  
うしてその彼等ハ其の校を占領して武官の部隊  
を現子其れ我等信守の派し其の大人を其れ決  
然し其の執令を強制せんとす其決然を現任理  
事は辞職せしむる外余と田中唯坂本との  
三人に對ししと其れ強制せんとす彼等の一派多  
くは断せんことを強利せんといふ  
其の四五十一名ありきも三十九名<sup>保</sup>兩中校歌を言ひ

して各隊其の人の人を河川を而して彼等う夜  
と徹しし目的を遂げんと擬しんとす今も坂本  
の西へまゝ田中と既に前又絶えんとすと聲言す  
此事警察と打合ぬる事ありし其れ其れ  
一面に彼等と其れを許すことせしむるに對して  
と十数名の此者を派しし門前を警を以し門内  
より七六若干の用袖を配するも其れ其れ  
行儀ききり相違するも其れ其れ其れ其れ  
と其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
感せし免る程なり個人に對して其れ其れ其れ  
の及して根柢なる其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
今も破却し其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

の考す一色し等の形出る敬言吏と乱徒の事  
所ニ出入するも黙こさる戸を破り或十枚の  
硝子板を壊さるも必ぬり已みたり彼等乱徒  
の幹部の固方彼等彼等と稱し鍵を盗る  
べきことを通りなら彼等と之れを彼拒し其  
無きを得るも彼等の意と欲とあること此  
事と以て推すべし、学校の監督部と書  
の意はさるるも為るべき種々の請求を為せ  
吏と或人と之れも又付けたり徒ら多敷の  
群衆して信託するのみ、理事と此の為るべ  
き教員官の然るに横柄一深衣故本四中  
徳西人の所轄は勿論故に本館長の内定と

功の臨海する所ありし又署長を初め而令  
を謝絶し漸や水面と得て詰り彼れ恒中  
しし即本職に改善を畫すといふ事  
生の事さるる信便をの者とすといふ事  
つ道辭と弄するも、彼れは治安警務の何  
とて或んといふ事あり、彼れは順逆を令  
顛倒し是る者の如くあるの流矢と要求と終  
に要領を得る能らざる其夜を令く乱徒の占領  
に委したり、彼等乱徒と名する所解を強  
聴るも人の口は休校を為すことを決意し  
若おそふとの之れを知ること勿論なり、之れを知り  
つて可校を其の占領に任す是れ乱徒にた

乱徒を援けつ同内々休校を幫助する者ありき  
し何んぞ何んとするんか聖教の崩校の事日多  
内々乱徒より外日多し未だの教の事との入  
を拒む彼等と格を之をも便するものあり  
而して當夜教の事より理するの事方治ある  
を假けり自當と退云と今年せりし、この事  
に乱徒の後援を興くを所せりしこと言  
らるる、果して彼等と徹宵準備を教に聖  
十日崩校の報号せぬ所の濟し入る来りや崩  
にも教出せしと校門に入ると拒む同内々休校  
と云ふし、是れは是れを先きし後、格を之十二  
の崩校の式も妨害を言けんことを言ふ、教に聖

子生道路の教を衛するを托し其一流を得りし  
又崩校の事領を許す、夜の教を察せし格を助  
教の休の手配を為すの、言もさるる、彼等亂  
徒の爲す又一仕し、格を、從來彼等の皆  
後、ぬきし官僚あるの疑を、一停深うらし  
多し、吾等をさるる、家、在り深夜亂徒の乱  
未、妨げん睡眠を得る格を、聖朝大股師、  
今、前夜の事を、委曲に聴き、益、彼等の皆  
後、官権ある官権を、格を、通し、格を、  
の、感、し、得、し、既、占、領、の、侮、辱、を  
言、け、る、事、也、彼、等、を、逐、ふ、法、の、事、し、た、崩、校、を  
と、こ、ん、も、以、上、の、不、面、目、ある、事、也、高、尚、者、の、矢、能、亦

之れは、大なる者あり、のち、天に俯仰し、  
勤業を禁する能はざるなりし

其後、況と占領せしむる校長を、  
お負理より荒干の教授資格を、  
今、  
学校の臨時事務所、  
又、

理事、  
失態、  
謝する、  
教授団、

て前、  
を、  
す、  
後、  
を、  
を、  
を、

斯の内決、  
を、

果敢と云ふも此場合余未だ政府者又憲法の時機  
も稍々早と云ふことあり候きまきまあり候も或は  
傍觀者目しての意氣地ありと云ふことあり候も  
べしと思惟し然るも憲法を講議する時「却  
つて外部も憲法に従ふことのみならずあり且  
つ理事一として此場合憲法を講議せしむるに  
んバ〇他は再起を不可能とする事懸念せし無  
きと云ふことを以つて皆内閣田中余并に田中ら  
連帯する位を以つて維持員と罷りたることな  
りし然る但し斯る重大なる決定を為すに當り  
一應病侯の認許を請ふに當りんも病侯  
の侯に之を固く拒りしことと可成りしことと

として已むるも其の手續をも省略して此の内決  
を為すに當りし尚ほ吾等が所する決定を為すに  
せし秩序の回復も遺憾なく十日間休校  
の廣先を為すに到りし事一面を評議  
會の有志の有志一面を教授会の花干子  
を招きて報告に及びし事復教授團に十日  
間を以て黨解決する無くんば憲法を以て  
し来るあり候候中より野間のことき暴徒  
に或る條件を帯びて退去を談判せんを申出  
あり吾等の内決「」後んたんこと八方を  
へんて辭意を決ししを得たりし事  
しる事と成りしりしんことぬらう憲法の迅速



已むを得ざるし所以るは日教授固と清風亭  
に於て命合し理る者あり辭意を決し以てをせし  
今更のこころ前日の決議の穩當を缺キしこと  
を自覚せしを乞ふと共に暴徒の所為に憤慨し  
前日迄氣休勝手を唱ひ傳へたる者も排克  
漸やく統束して暴徒并に同連ある者を排克  
とするに傾き終る断然し決議を為するに  
り而して其の斯の決議を為すにむとせりし前  
早く杉平牧野平沼服部四教授を以て  
向面除惡とせしむと何人とせしむるに理不  
と見振えとつけ尋尋の室に未だ辭職  
と申出せしむる評議力の野間と一筆を以て

暴徒と交渉の上双方に無関係の者を見つくと  
海評依るに非ぬ教授固とし奉け之を暴  
徒の退去を談判せしむべしと野間の言を  
このころ者あるうめ維持するにむとせりし  
かんとしと康平君んせしむる此業を教授固うん  
領但も暴徒と目する故を以て委員の差遣  
を謝絶ししを破んせしむる老侯之敵り占領を  
方ゆく遺憾を感せしむる早く退去せしむべしと  
昔夜をせん終るる前の敬を祝儀等西久保の  
道と早稲田に扱き候の命を現任総監に法  
判する事とせしむる早の未合はせしむる  
當長と對してても差ある必要ありし交渉を扱

任せしをながか皆一七効を収ちる能ひありし西久  
保り欲す親信此を幼洲して早稲田に拘束せし  
る一昨一時又垂んとする時ありし如北して未二百七  
暴徒の占領に委しり、在校の暴徒と大坂と  
の敵にて校歌を斉唱し時々革命軍萬歳を街  
頭を叫び、暴徒の幹部を門の入り口に  
しを敵に戒し時々自動車と馬車を併用し  
山街路を往来しするを、突然戦場の状  
を呈せり

(九月十六日録)

上援二日、歩も敵を察者傍親するの由に状に憤慨し  
十三日の早朝を以て坂本田中の両理事、後原由教初  
三田敬を視察せし三田文お等を慰問して内打込

此の點にとも大に法難する所あり内相も處理を講  
議するの如く政府に不利なるを認めざる者ありぬ  
當該官の命令を傳ふべしと言ひし果して達を下  
しざる者と見え漸やく敬を官手を下せんとす  
かをホし来りたるが正午にむも尚ほ解決を  
さるるをせり。野間が暴徒と衝突の間に  
在往來し、警備隊格を使用せしむるが  
等を退去せしむるの斡旋を試みんうあり  
多く、の時間を為りしむる由也、折のむく  
流徒の引上げたる夜、今十二時頃、一校市  
務長の引續をよりしむる午前十時頃、一時次  
とす、彼等暴徒一旦運動場に隊伍を整

大隈帥兼い坂本の邸前に朝馬の萬歳を叫び  
終るに中柳より天竺考之の川前に別荘あり  
都して之を感謝の意を致し天竺を勤しむる  
旋の祝言を表し天竺を深め衣履を  
改め出て謝辭を陳べると云ふ天竺は  
奉に謝言を表するもつと其意を承  
天竺の事大隈に免る能はざるは云ふは  
余の意

早稲田大隈の今日のこと言ふ深く異心を要せり  
大隈は大隈侯に創主たる侯と政治上に満洲の敵  
り雪つて聞くと山縣侯腹心の徒に告げしは  
異しりしは早稲田大隈の事なり  
満洲の事

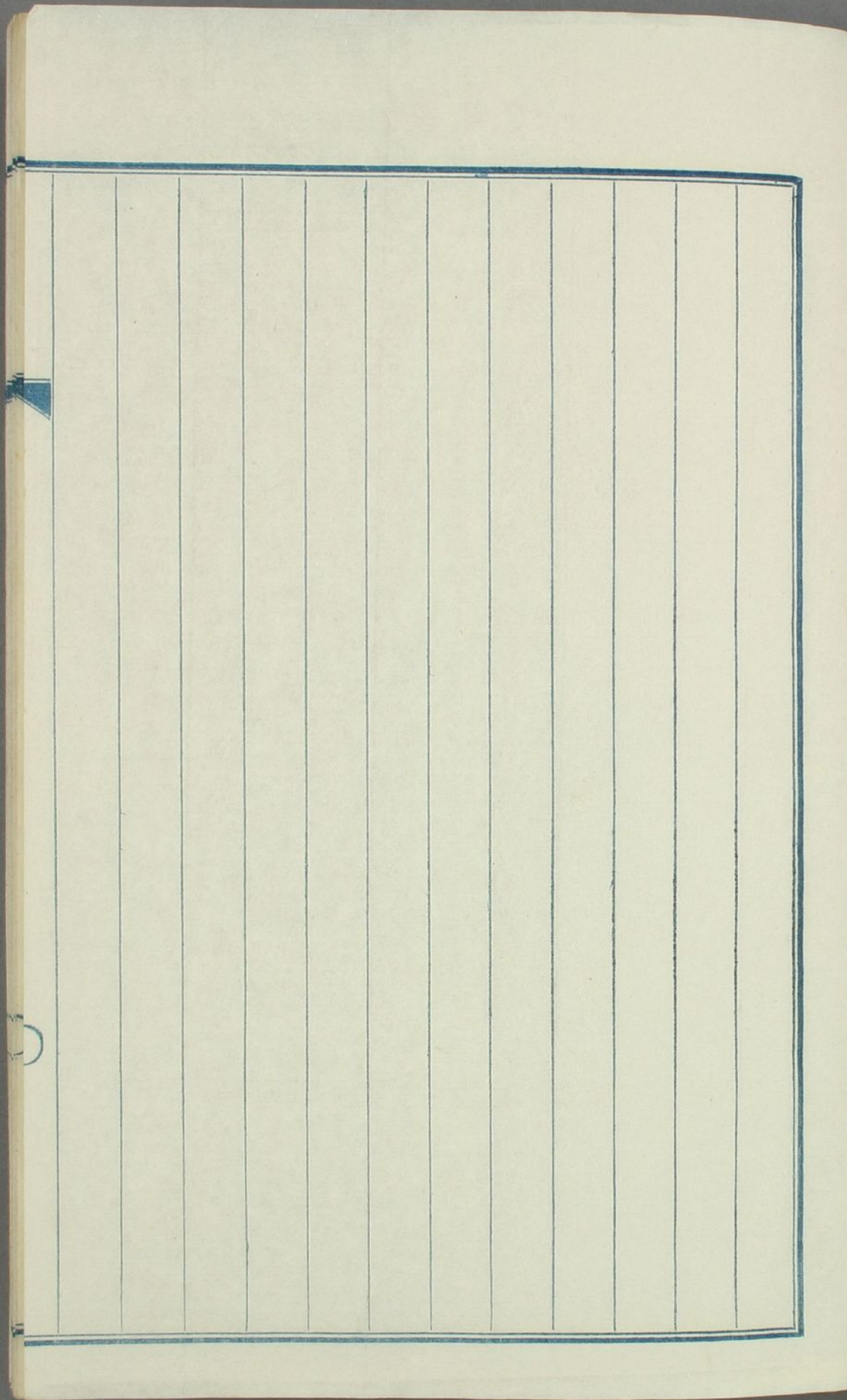
と力するを視て之れを表せざるべからず  
満洲の事ありありとめ此きよありては市の事あり  
同日に漢了の事あり今や満洲の政權を握  
りし時より方り保つて天竺の族を内務に生かす  
は云ふに満洲の棄すべし時より満洲官僚の欲  
する所を其を滅するは將に天竺を以て取  
つて代へんとするも其の可からざるもめ  
くも大隈侯の手より之れを引き離れんと欲す  
は云ふを要せず言を云ふは早稲田大隈の事なり  
満洲の敵より徳長を昔前内務の首班に列し  
其の長と文相とする余の心は徳長を以て  
大隈侯後援分を以て守りし或るの教授を以

指揮して遂に麻坊に立入り免をうり 蒲湖内閣の横  
怒を冒味しとるや知悉し、此等より事と平まを  
吾等には覚悟するも、唯に貴校の徳よりハ  
総長侯に初を生し、彼等侯に益を棄て去るべき候  
余と異てとるを返す、貴校に但に彼等の暴  
挙は渠等の為り不利なりとて吾等の為り不利を  
を生じとる、天下の人心を此暴動前は天竺に傾き  
たり、こゝに執ちるべき候と多ん、其而を却成りん  
遂に、吾等其きき、天竺を當時任期書免とす  
も尚、其長の位一更にあり、其再任と、何外為  
に格を立、然とす所あり、而して天竺を抗護  
する者、其高田を踏くと、天竺の再任を妨り

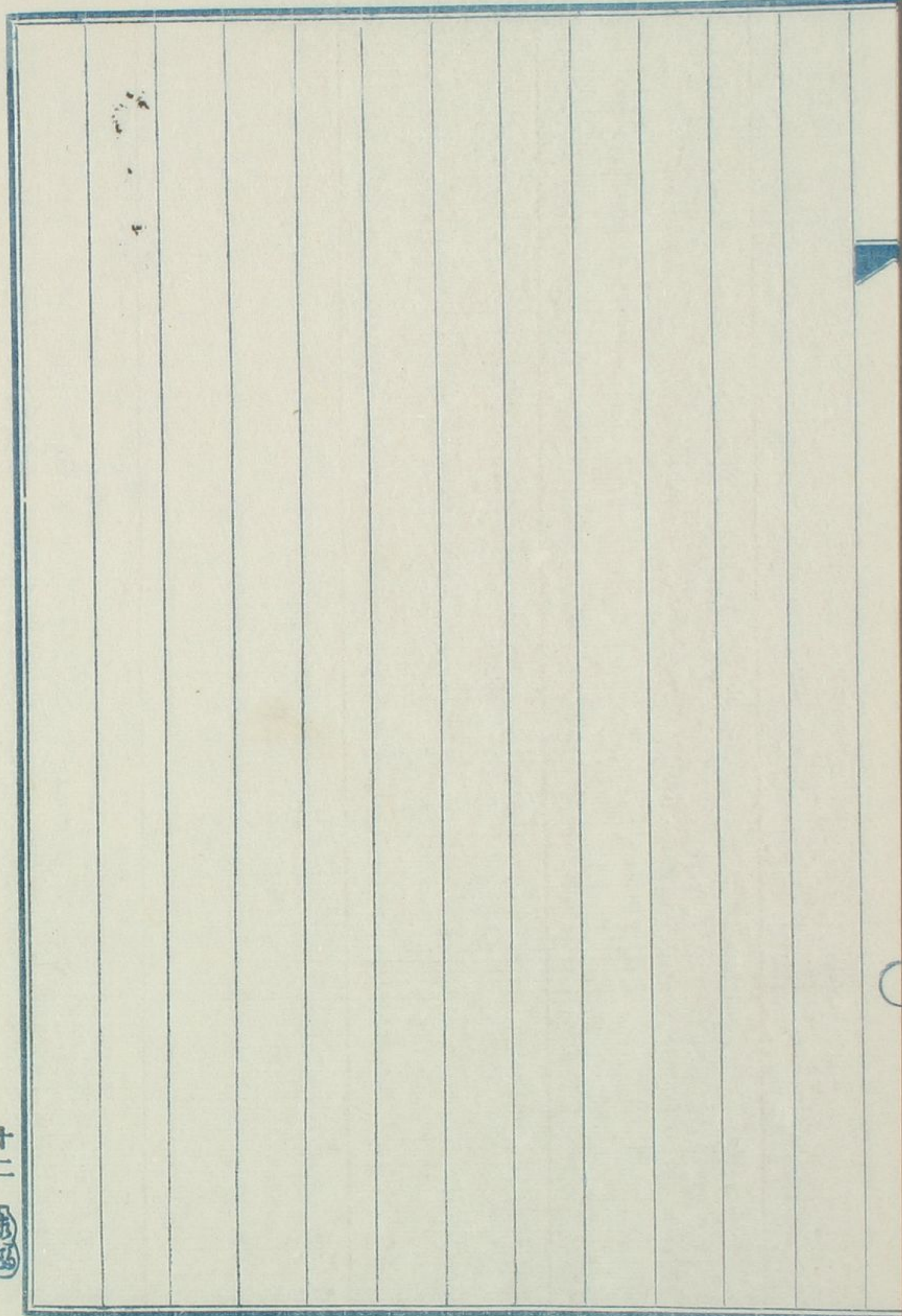
くる者にあらず、天竺に、何れの集あも、も敢て怪  
し、とを要せり、高田并に、其後持部、に、ある  
世の誤解、は、口、の、甚しく、終に、之を、解く  
然、口、の、甚しく、終に、之を、解く  
七月、黒白の、遂に、永久、利を、ん、順逆、長、一、二、款  
例、の、実、あり、し、と、而、今、四、の、暴、を、も、教  
育、界、に、格、の、ける、未、や、其、の、格、珍、き、し、と、風  
教、上、の、大、禍、を、此、の、格、を、を、視、格、し、と、其、校、の、内、の  
為、し、も、其、の、校、を、ある、し、の、是、初、め、を、正、邪、の  
ある、所、を、鑑、別、し、得、ず、前、日、迄、を、免、用、の  
論、議、を、ち、せ、る、に、棄、る、の、致、授、を、白、の、話、解、を  
七、二、三、漸、と、暴、徒、を、非、難、し、滋、然、其、校、持

部を擁護せんとすべし。傾きたる彼等暴徒を形  
勢の迫るるを視て益々暴を逞めんと謀しつゝ  
あるうやしと名をも果を益々狂暴を極めんば  
是れ大人心を失ふべき不必然なる。但し、この校の前途  
ハ甚此端途なる。現理多岐持る職を退き、新に  
出するも能く前途の難局ハ當り得んや否  
や校規の改正を以て理多岐。對しては暗進  
る。或は部幹部を改め七之九に編んで差違  
の危険なきふあらし。要ハこの校もこの前途を憂ふ  
校友と評議を致し、校規を完修せらるべし。而して  
貴弟此の校友ハ未だ中絶を現解せざるを比し  
以り是也。吾人と前途を危ぶまざるを得ざる也。

大正六年九月十七日 各教員 後が閉を偷ひて所  
懐を誌すと云ふ



十二



以下  
三丁  
白紙

の垣内を越え、をゆつてよりのあぢのあぢに法を  
有るは自他の役の行者を積りて之を  
之を漢ていふと云ふに、自己の心をすべしきもあ  
れ、ちのちあると云ふ、其意を自ら人へ何んと  
云んて七條の術一に法うて行ふゆゑなる、其  
校の二の末の無い、と云ふと自分入起て云  
ふ、あつたが、あつた校う漬れ、自ら入ると云  
と、起てぬ、拾へ行る、母をえ、殺入ると云  
と、と云ふと、道進を又、あつた問、題を、あつた  
糾と扱ひて、一、白く、鮮く、職を、以後を、或は漬  
ぬ、限らぬと進、執し、は、極の末路、乃ち大段の後  
と、よく似て、と云ふと、そのと、山、ぬと、大、清、所、の、名、を、

向いとも少ぬ、比し、此、今、う、大、段、候、日、の、者、あ、つ、つ、を  
病、大、段、に、比し、其、日、を、片、押、に、比し、改、申、や、回、中  
（種）を、木、打、者、つ、木、に、比し、と、え、有、城、も、或、を、可、扱  
ひ、無、げ、ん、の、が、い、に、と、云、款、也、と、切、り、大、段  
先、候、の、終、を、種、一、う、の、為、の、偉、人、お、お、危、の、事、  
豆、を、え、る、も、其、城、を、改、校、の、二、事、を、と、と、と、と、  
忍、び、ぬ、と、云、ふ、め、う、も、日、毎、ひ、あ、つ、た、候、を、し、種  
く、扱、る、大、英、新、を、え、ら、せ、る、と、と、と、と、一、代、に、初、め、  
代、に、閉、つ、る、と、云、ふ、こと、も、し、破、天、皇、の、事、が、而、ち、  
を、あ、つ、た、何、ん、か、千、の、年、後、の、仕、事、も、困、る、又  
閉、鎖、七、解、校、七、條、固、法、人、の、定、款、の、事、解、法、  
別、産、許、し、の、事、を、ま、こと、な、困、つ、た、と、い、ふ、と、



三時分も誦論しそのおもしろいお話をしつゝ出する  
仕方のこと

坪ゆきもききあつてさきさきと心つた二脚の机  
を元とて示さるゝ先年より持あつて  
自方のさきくつゝ人うぢら来つた。侍止物集  
井子遺の夏の机を模倣しそのいぢり杖  
と塗料とを違つてそのうす人うぢりといひ  
似し二脚のゆ一脚とさういふは違ひ  
言ひ通はせ味しそのいぢり杖の  
朱漆に葉井子の子孫の先代文豪の遺  
品といふことと三行のいぢり杖といふ  
ものうぢり杖の机と認めらるゝ所以

あつたが又人かさうかと母あめ其言初を  
以ゆる思ひのれつゝ時代、年いぬ又脚  
とあつてその格子の向ふも破つて元福式  
と又元とて、あはれ机の言ひと初  
ちもさきし之んを捨つてそのいぢり杖  
の形容もいぢり杖とていぢり杖といひ  
てその、同じいぢり杖といひ人の遺品  
とていぢり杖といひ人の遺品といひ  
ていぢり杖といひ人の遺品といひ  
あはれ杖の目立つていぢり杖といひ  
人の遺品といひ人の遺品といひ



○果樹の内垂を脱して趣味を感ずる（凡そ）柿（凡そ）  
 大枝小枝各差錯綜南宗大家の業（凡そ）  
 樹上にあらず果実の趣を為す（凡そ）と松栢（凡そ）  
 文人の意此の樹を漸く可なり  
 柳栢竹と云ふものも幹竹の如く葉栢の如  
 し花栢の如し依つて立つて支那も来りて  
 う是ん又一程の凡俗あり文人の珍重に値す  
 余未レハハの肥幹よりあるを邸内の一隅よ  
 リ採り得て之んと茶室の庭に置り其位  
 置新築の空に相對し茶室の裏に其の  
 表面をえり新築の裏に其の背面をえり而し

て西面甚は致す、蓋し背西に致すと絶  
 頂上（凡そ）と距二尺許（凡そ）  
 通し（凡そ）の鐘鏢あり老蒼の味  
 搦すべし而して枝の屈曲（凡そ）也  
 余児に語つて曰く此樹（凡そ）日本畫  
 家にて此樹を畫き得る者（凡そ）唯此（凡そ）の竹田  
 ありと  
 ○幼時嘗て今ある其味を忘るべしと曰く天門冬  
 曰くカニンシ（凡そ）とん（凡そ）と東都に於て此物無きとある  
 たるを以て（凡そ）三十数年一此物也東都に之れを獲  
 たることありて天門冬の味を砂糖漬に存す其の  
 葉は片葉も（凡そ）織細く（凡そ）甚は致すカニンシ

葉針状

ニ之林檎、類する者形貌甚に似たり唯此其肉林檎  
を破り花干の滋味と甘味を尚有し味甚に重  
き大根おろしの汁を以て煮きく私に云ふ砂  
糖を以てせん味尤も佳也

○余西瓜を嗜する然れども三伏の炎暑銀盆に盛る  
砂糖と氷と點して冷ふ西瓜清風の生るるを乞  
ふ

○雪のり大隈侯に遊伴しと市山ぬ、遊ぶ時炎熱  
の候に屬す某所、多くの同人侯一行を迎ひ之の  
薦あるに西瓜を以てする其色其味都門の者と同  
同に、一行程激賞惜み余の経験に於て此  
西瓜の優る者を味ひたることあり、(裏山蓋し)

甚高山の瑞也、爾来河地の知人夏時、際すん  
がらぎ送り来る

○六の村考らし木地の小買向と猶小買約  
八七寸四方幅のハ寸松栢心を葉を以て輪  
廓をつけたるもの淺き、抽子するケンピンの蓋  
を外せば中へ取り外しの出来、栢の落板直  
に桐を以て果を上下の界をあらす、外部ケンピン  
の鏡板を柱山牧舟の墨を高く、肉を三三  
とを蘭流す、牧草方角の目山、水豊画あり  
三画、一、活を此州の名人也、此の亦七と兵香  
接すおの弁あるおこ、雪接の味、之、四家  
の畫しける者、を此村考の平、う、物、さ、又、さ

たし名畫の枝を惜しむ聊か加ふして篋鳥の形  
に似たり者もさう皆極を今より叙と舊あり其の  
用印用硯筆も亦あり雪松墨と数あるは  
今ある花より余り杜若の如く云ふは之れを  
繪に入ると者若く執味ある所又さうありけり  
摺る縁ありけり也 大正六年九月廿二日録



